
愛 > 恋 > 好きの物語

mkun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛>恋>好きの物語

【Zコード】

Z5342A

【作者名】

mkun

【あらすじ】

高校生の雅夫が銀婚式を迎えるまでの物語です。第一部0・さやかさんへのラブレター1・みほと雅夫の小学校、中学時代2・自衛隊のイラク派遣3・雅夫の文化祭第二部4・雅夫のマラソン大会とみほの文化祭第三部5・初めてのデートここまでは、完成。【その後の予定。未完成。】6・みほとの別れ7・さやかさんとの出会い8・みほの結婚9・雅夫の結婚10・銀婚式

愛へ恋へ好きの物語・第一部・みほの文化祭まで（前書き）

「愛へ恋へ好きの物語」は、高校の生徒向けに、2年前から書いてきたものです。

少し書いては生徒に配り、を繰り返してきました。

多少、修正しましたが、話が時間的にいつたり、きたりするのは、そのためです。
ごめんなさい。

【プロローグ】

愛と恋と好きの違いつてなんだろう。よくわからない。
不等式「愛へ恋へ好き」
気持ちの度合いの違いだろうか。違う気がする。
「してはいけない恋」という表現はある。
しかし、「悪い好き」と「正しい好き」はない。
人を愛するという事はどういう事なのか。
正解にはたどりつけないだろうが。あえて、この問題に挑戦してみよ。

雅夫は2004年に高校に入学する。

その雅夫が22才になつた時から、物語は始まります。

雅夫は農学部の3年生。浪人している。

2009年に磐梯山が噴火し、その森林への影響を調査する為に、
北関東の山岳地帯にでかけた。

【2010年9月せやかさんへのラブレター】

なつ は すぎ
きのう につこう の せんじょうがはら へ でかけた
すすき が かぜ に ゆられて とても きれい だつた よ
そよ ふく かぜ は さわやか で
その かぜ の よう に さわやかな きみ
つかまえ よう と しても つかまえ られない

みずうみ に まつしろな ふね が うかんで いる
それ が あわく あかねいろ に そまつて いく

あつい なつ も おわり
ゆうひ の そまり かた も やさしく なつて いた
ぼく の じこひ も そう かも しれない

どれ だけ の とき が すぎさつて しまつた のか
どれ だけ の とき が すぎて いう と している のか
でも しつかり と そまつて いる よ
きみ へ の おもい あわく あかく

ゆうやけ つて あかだけ では ないん だね
ちへいせん に ふれる ところ は あか そして だいだい
にじ の よう に きいろ きみどり あお
さいじー は こんべき の うちゅう いろ

きみ の こと を かんがえ ながら
そら には ほし が かがやき はじめ とき の ながれ
は とまる
いき を して いる のは きみ と ぼく だけ
ちいさな ほし おおきな ほし たくさん の ほし
おおく の じだい

ぼく は おもう
きみ が この ほし に うまれて くれて よかつた
この とき に うまれて くれて よかつた
ほんとう に よかつた・・・

さやかさんは昨年、短大を卒業して一流商社の〇一二年生。一一一
歳になつたばかりである。

9・1・1の後遺症はまだ、残つていて、06年から日本の人口が減り始め、ゆるやかな不況が続いている。

が、かえって、それだけに一部の会社は忙しい。

入社2年目だというのに、さやかさんが9時まで会社に残っている事はめずらしくなった。

雅夫は大学生だが向こうは働いている。

それに商社というのは残業が多い。気兼ねして電話もなかなか、かけにくい。

手紙を出してから、会うまでに、何週間かの間があった。

もちろん、それがさやかさんとの初めてのデートではない。さやかさんと会つてから、2年の月日がたつていた。

雅夫はさやかさんがいる事だけでよかつたと思つている。

この気持ちは、愛なのか、恋なのか。そして、・・・

話は一端、2005年にさかのぼる。

女の子との初めてのデートは、雅夫が高校2年の時だった。相手は、みほという名前の物静かな女の子だった。

なんでさやかさんは「さん」がついて、みほにはつかないのか。

【幼なじみの みほという女の子】2005年。雅夫、高校2年生。

なんでみほさんでなく、みほなのか。8年来の幼なじみだからである。

みほは小学校3年の時に転校して来た。髪はショートカットでボーリッシュな女の子だった。

以来、8年の幼なじみである。だが、単なる幼なじみではない。

小学校の時の雅夫の学年は1クラスだけで、クラス替えは一切なかった。

毎日毎日4年間、一緒に遠足も一緒に。

さらに、雅夫の家からみほの家まで100m足らずである。だから、夏休みだって、意図せずに会つてしまつ。

父親の顔は知らないが、母親とは顔見知りである。

運動会の時は雅夫の学年だけ、1クラスを赤組と白組に分けた。

同じ組に入れればいいなと思った事もあるかもしれないが、

小学生の「好き」って、あの子も好き、この子も好き、その子も好きというレベルで、

恋や愛とは違う。

小学校の高学年ではよくあるように、この頃は雅夫よりみほの方が強かった。

中学は3クラスだった。

同じクラスになつた事はなかつたが、1日1回ぐらいは顔を見ていたらう。

b o y i s h iは小学校とともに卒業して、みほも段々と女性らしさを増していくのだろうが、

この頃は何の感情もなかつた。

幼なじみの中の1人にすぎなかつた。

中学1年の秋、ニュー・ヨーク911が起きる。

この事件は亡くなつた50000の方だけでなく、多くの人の運命を変えたが、

この事件が後々、雅夫とみほにも影響を及ぼす。

そして、この二人の「愛」なのか「恋」なのか、なんだか分からない物語は2005年から、

みほが他の人と結婚するまで、5年以上も続くのである。

世界は騒々しかつたが、雅夫の中学時代は何事もなく過ぎ、二人は別々の高校に進学していった。

みほは女子校へ、雅夫は男子校へ。

【1年さかのぼつて、まだ幼なじみの2004年。高校1年】

二人はともに電車通学だったので、帰りに駅で会つ事があった。家が同じ方角なので一緒に帰つた。10分ぐらい。

雅夫は山岳部に入つていた。

「今度の夏の合宿は1週間かけて南アルプスを縦走するんだって。荷物は1人、30kgだつて、先輩が言つていた。」

「へえ、雅夫君には似合わないわね。」

他の友達も例外なく、同じ事を言つていた。

1年生の頃の雅夫はちょっとマラソンが速いぐらいで（1500m 5分ぐらい）、筋肉はほとんどついていなかつた。

「私の高校は毎週礼拝があるのでよ。」

「みほさんはクリスチヤンではないよね。」面と向かつては「さん」をつける。

「うん。でも全員参加するの。」

みほの学校はミッション系で、物静かなみほには、とっても似合つていた。

「じゃあね。」

小学校の時のように、自然に、一人は別れていつた。

6月、イラクに暫定政府ができる。

しかし、イラクもアフガンも治安は悪化するばかりだつた。

【2005年の初めてのデートの2ヶ月前。雅夫の文化祭9月20日】

05年7月25日、とんでもない事が起きた。

イラクに派遣された自衛隊の駐屯地に迫撃砲が撃ち込まれたのである。

あと半年後にはイラクの正式政府ができ、自衛隊も撤退するはずだった。

3人の自衛隊員が亡くなつた。一人は20代で、残りの一人がみほの父親だつた。

みほの父親が自衛隊員だという事はこの時、初めて知つた。それで、父親の顔を見た事がなかつたのか。

小学校の友達と一緒に通夜に行つた。誰も何も話そうとはしなかつた。

高校2年生である。世の中の事はそこそこ知っている。

こうなつたのは、2001年の9.11が原因だ。

あの事件がきっかけで、アメリカは1ヶ月後にアフガンを空爆し、2003年、イラクに侵攻する。

日本は武力攻撃には参加しなかつたが、その支援はした。

みんな、それなりに考えは持つているだろう。でも、誰も何も話そ

うとはしなかつた。

みほの父親に対する政府の保障は手厚くされるだろう。

でも、もう、遅い。みほの顔はまともに見れなかつた。

ただ、夏休みが1ヶ月残つているのが、唯一つのすくいだつた。

2005年は、戦争が終つて60年目なので、例年になく、戦争を

TVがとりあげていた。

8月。6日（広島）、9日（長崎）、15日（終戦）。

これまで、なんとなく、そんな時代もあつたのかなあと漠然と思つていただけだつた。

しかし、身近な人の父親が亡くなつて、60年前も今も同じなんだという事がはつきりした。

9月になると文化祭の季節である。

家は近くだが、あれ以来、一度も会つていない。

みほはどうしているのかな。

小学校3年から、8年もたつていて、お互い空氣のような存在である。

だから、雅夫に気負いはなかつた。でも、ためらいはあつた。

何だかんだ言つても、思春期の男の子である。

思い切つて、文化祭の招待券を送つた。

こうして、地球の裏側のニューヨークの事件は雅夫とみほの人生に影響を及ぼしていくのである。

次の日、メールではなく、電話があった。

「ありがとう、雅夫君。私は元気よ。20日には必ず行くわ。」

これまでのようになに物静かなしゃべり方なので、本当に元気になつたかどうかは分からなかつた。短い言葉だつたけど、雅夫の気持ちは少しだけ晴れた。

20日。校門で待つていると、みほが歩いてきた。

物静かだけど、ステキな笑顔で言つた。

「ありがとう。雅夫君。」

この頃のみほの髪型はセミロングになつていた。元気そうだつた。

「今度は私の高校の文化祭に来てね。だけど、私、文化祭実行委員長だから忙しくて、

なかなか相手してあげられないかもしねないけど。」

「うん。僕も学校のマラソン大会とぶつかつてゐるけど、午後には必ず行くよ。」

聞いてみると、クラスのではなく、学校全体の実行委員長だと言つ。みほの性格には合つていないと思つたが、小学校の頃はboyishで活発な女の子だつた。

よく、雅夫もいじめられた。

中学の時はクラスが別で、あまり話す機会は多くなかつたけど、いつから、変わつたのだろう。

中学1年の時は小学校と同じ明るさがあつた。

一瞬、雅夫の体に電撃が走つた。

そうか、テロ特措法ができる、自衛隊がアメリカの支援を始めた頃だ。

たしか、中学1年から2年にかけての事だ。

そうだつたのか。

自分の気がつかないところで、そんな事があつたのか。

これからも自分の知らないところで、いろんな事が進んで行くかもしれないな。

「これ、後で読んでみて。」

別れ際に渡されたのは『中原 中也』の詩集だつた。

雅夫に詩集の趣味はなかつたが、この時点で彼女の心境を考えれば、

「僕に詩集の趣味はない。」とは言えない。

みほが帰つてから、しおりのはさんであつた所を開けてみた。

汚れちまつた悲しみに

いたいたしくも怖気づき

汚れちまつた悲しみに

なすところなく日は暮れる

・・・この詩の意味する事は雅夫には分からなかつた。

でも、高校2年の女の子にふさわしいとは思えなかつた。

表面的には明るく振る舞ついても、まだ、2ヶ月足らずだから。少しでも、みほの支えになつてやりたいと思つた。

歌も映画もリバイバルが流行つていた。

たいがい、30年前のものだ。

そのひとつに「小さな恋のメロディ」という映画があつた。

映画はまだ見ていなかつたが、その主題歌は知つていた。

曲名は「FIRST OF MAY」 by ビージーズ。

【小さな恋のメロディの主題歌FIRST OF MAY（若葉の頃）ビージーズ】

この歌は雅夫とみほの関係を象徴している。

*クリスマスツリーとの大小が逆転するような長い年月。NOW

we are tall

♪幼い時から、雅夫はみほを好きだつたようである。

*壊れてしまつた恋。The day I kissed you

cheek and you were gone

♪高校生の雅夫とみほの恋のようなものは数ヶ月で終わる。

*でも、二人の愛はなくならない。Our love will

never die

「でも、雅夫の愛のようなものは何年も続く。

恋と愛。恋のようなものと愛のようなもの。

「あなたが好き。」と言った時、それは愛なのか恋なのか。それとは別なものなのか。

やつと2005年の初めてのデートなのですが。この歌が一人の運命と奇妙に重なつていて、雅夫はまだ気づいていなかつた。

【台湾新幹線開通】2005年10月の新聞から。これは、フイクションです。

台北から高雄までの全線345kmを90分で結ぶ。運賃は飛行機代の6割の安さ。

導入車両は、JR東海の「700系のぞみ」改良型で、最高時速350Km。

車両以外の信号・コンピュータシステムなど、すべて、日本のものが使われる。

最初、車両を含むシステムは、価格面から歐州勢が（ドイツ、フランスの歐州高速鉄道連盟）

圧倒的優勢にあつた。

それで、受注はほぼ確実とみられていた。

しかし、性能や安全面から日本の新幹線を見直す意見が台湾内で強まり、大逆転で日本に受注が決定した。

ヨーロッパの高速鉄道は事故が多発している。

最大のものは、1998年、ドイツの高速鉄道、

インター・シティ・エクスプレス（ICE）の脱線事故である。

時速200キロで走っていた高速列車が脱線し、死亡した犠牲者は102人にのぼつた。

日本では、三島駅で高校生が指をはさまれて、ひきずられ亡くなつた死亡事故だけである。

中越地震で脱線しても死亡者はいなかつた。

韓国ではフランスのものを導入した高速鉄道（最高時速300km）が2004年営業を開始している。

【初めてのデーターの前のみほの文化祭の前の日。11月2日】

雅夫は「世界最速の日本の新幹線が台湾新幹線に抜かれた。」といふニュースを見て、思った。

日本の技術が世界へ広がるのは良い事だ。ビニが一番でもいいではないか。

去年のオリンピックに日本男子バレーは出場できなかつた。しかし、クイック攻撃、時間差など、すべて日本が開発したものだ。平和の祭典オリンピックでもイラク戦争は中止されなかつた。

そして、9月の雅夫の文化祭の時の事を思い出していた。

雅夫の所属する山岳部は展示を行つていた。

山の装備、ピッケルやアイゼン。過去の部誌などを置いていた。

山岳部の部誌は1年間に行つた山行の記録や山に関するエッセイなどを

1、2年の部員が手分けして書く。

ただ、3年生は何を書いても良いというルールがあつた。アメリカがイラクに侵攻した03年の部誌には3年生が、そのアメリカの攻撃に関する文章を書いていた。

半分ふざけた書き方なのでみほには見せたくないなかつた。

やつと、みほに明るさが出てきた時である。

しかし、2年生の雅夫には、先輩をさしあいて、それを予め隠しておく事はできなかつた。

「1Jの部誌もられないの。」とみほが言いながら、その部誌を手に取ろうとした。

みほは詩でも小説でも文章を読むのが好きである。

「高校生の書いた文章つて、興味があるわ。」

「これは、1冊しかないし、僕が高校に入る前の先輩たちが作ったものだから。」

先輩達の書いている事はもつともだが、みほに見せるわけにはいかない。

「こっちの去年作ったものなら、たくさんあるからいいよ。」

「雅夫君の書いたものもあるの。」

「モチロン。ダカラ、コツチノヲ アゲルカラ、ヨンデミテ。」

みほは04年度の部誌を手にした。

「雅夫君の目の前で読むのはやめておくわ。感想は後でメールする。」

「

といふことで事無きを得た。

みほが見なかつた先輩の文章その1

【月の裏側のUFO基地での会話】3年生が書いた03年度部誌より

「銀河連邦地球監視団の団長として、この60年間の地球人の行動について、連邦総会に重要な報告をしなければならない。

はつきり言つて地球人は我が銀河連邦に大きな脅威を与えている。60年前、核爆弾を開発し、使用したばかりか、いまだに保有し、新たに開発もしている。

35年前には月にロケットを飛ばし、今や、太陽系外にまで到達するロケットを開発しようとしている。

ま、温暖化対策や地球人同士の戦争に多大な費用がかかるから、そう簡単にはいかないだろうが。

とにかく20年後には、月や木星の我々の基地を発見し攻撃をしかけてくるかもしれない。」

「まったく、同感です。」

これまで、地球人の思い上がりを正すため、

我々の宇宙船を飛ばし、宇宙標準の高貴な文明があることを示唆してきました。

にもかかわらずに、野蛮で攻撃的な地球人は、いつこうして考えを改めません。』

「平和的手段では限りがあるという事を報告書に書いておこなつ。」

「平和的手段ですか？ チェリノブイリの原発に細工して、核の恐ろしさを地球人に再確認させたのは団長のペントゴン星ではなかつたのですか。」

「何を言つておる。チャレンジャーに細工をして宇宙開発を遅らせようとしたのは君のKGB星ではないのか。」

「仲間割れをしている場合ではありません。」

レノン星のよう、Give Peace A Chanceなどと言つてゐると、地球人の脅威に対抗できません。」

（平和にチャンスを与える。1969。）

「そうだ、過去の我々の行為はどうでもいいのだ。ならずものが住む現在の地球が問題なのだ。地球に対する武力攻撃を銀河連邦総会に進言しよう。」

「攻撃範囲はどこにしますか。」

悪の枢軸国、アメリカとロシアと中国にピンポイントですか。」

「いやいや、それだけでは心配だ。」

イギリスとフランスとインドとパキスタンとイスラエルとイラクと北朝鮮と。リビアとイランも危ないな。ついでにドイツと日本も加えとけ。」

「つまり地球総攻撃ですね。」

しかし、連邦同盟条約9条に

『宇宙開発にあたつては同盟に加盟していない低文明の惑星の生命を尊重し』

という条項があつたと思ひますが。』

「君は不勉強だな。」

それには但し書きがあつてな。

『ただし、同盟に加盟する惑星の生命・財産に脅威がある場合は除く』

と書いてある。』

「全く不勉強でして、我々の高貴な文明に財産といつ概念があるのを初めて知りました。

確か、レノン星の曲に

『I'm a goin'e no p o s s e s s i o n s (財産) I wonder if you can』

というのがありましたね。』

「レノン星の曲は全面禁止だ。

しかし、4光年離れた連邦本部に報告書が届くには我々の高貴な文明をもつてしても、4年かかってしまう。

それでは遅い。

連邦本部には事後報告するとして、ただちに総攻撃の準備をせよ。』

「たしか、さきほど20年後の脅威について、おっしゃっていたと思ひますが。』

「つむさこじとを言つて、逮捕するぞ。早くショックカノン砲の用意をしろ。』

「監視団の団長は攻撃軍の司令官も兼ねていたのですね。』

月の裏側のJF.O基地の外壁が白く塗られていたのは言つまでもない。（山田 太郎）

みほが見なかつた先輩の文章その2

【謹んでアメリカ国民に進言する】 3年生が書いた03年度部誌より

60年前、日本はハワイの真珠湾パールハーバーを攻撃しました。

それは、良い事ではありませんが、我が方にも少しの理由はあつたのです。

ただ、その攻撃はアメリカ本土に対してではありませんし、貴国を

占領しようとしたわけでもありません。

真珠湾にいた貴国の軍艦を沈没させようとしましただけです（その時、亡くなられた貴国の兵隊さんはお気の毒だと思いますが）ホノルルの病院や学校を爆撃したわけではないのです。だいたい10日もかけてハワイまでたどり着いた我が空母部隊に余分の戦闘機や爆弾はなかったのですから。

その攻撃に対しても貴国は

「リメンバー・パーカー・バー（真珠湾を忘れるな）」を合い言葉に日本憎しの感情で一致団結しました。

そして、アメリカ国民を戦場には送らないと公約したルーズベルト大統領も戦争を決断しました。

そして、東京（3月）沖縄（5月）広島・長崎（8月）だけでなく日本全土を破壊つきました。

また、先祖が日本人の貴国国民を幽閉しました。

その事について原因は我が方が作ったのですから、ここでは非難はしません。

8月15日に、我が國が受諾したポツダム宣言の最後を貴国は『これ以外の日本の選択は迅速かつ完全なる破壊あるのみ』と結んでいます。

ここまで貴国を怒らせたことを反省するのみです。

また、同宣言の中で

『我々は日本人を民族として奴隸化しようとして、または、国民として滅亡させようとする意図を有するものではないが、』と、わざわざ、ことわって、我が国の国民が誤解しないようにとの配慮をしていただきました。

さてこの度、貴国の大統領はイラクを攻撃しようとしています。

貴国の大統領であっても、無実のイラクの国民が死んでいくのを快く思つてないだろうとは想像します。

まさに『貴国の大統領はイラク人を民族として奴隸化しようとして、

または、国民として滅亡させようとする意図を有するものではない。

とおもいます。

また、戦争をする多くの理由があることも理解しています。

（テロ支援の疑惑・大量破壊兵器の保有・クルド人へのいじめ・油田の利権・アメリカ兵器の優秀さの誇示など）

また、テロ攻撃はアメリカだけに向けられたものではなく、全世界の国民をテロ攻撃から守るんだという

（飢えに苦しむ人やチェチエンやチベットやパレスチナで弾圧されている人も含めて）

高貴な正義感も理解しようと努めています。

確かに9・1・1の後、フセイン大統領は「これはアメリカの自業自得だ」というような事を言いました。

しかし、テロリスト、あるいはテロ支援者はバクダッドの宮殿の中でだけにいるのでしょうか。

大量破壊兵器はどこに隠されているのでしょうか。

さがすのは大変困難だと思います。

60年前のハワイ攻撃で我が機動部隊は貴国の空母を発見、撃沈できなかつたために、

もう一度、ミッドウェー海戦をするはめになり、さらなる犠牲者を出しました。

今回のイラク攻撃もそんなことになりはしないかと心配です。

また、我々の歴史の経験からして、

『リメンバー バクダッド』の呂い言葉がアラブ・イスラム世界に広がるのではないかという事も心配です。

首都を攻撃し占領するのであれば、その恨みは真珠湾の軍艦の比ではありません。

さらに、貴国の昔の理屈をまねして、「BIN=ラティンが

「我々の同胞、聖戦の兵士の犠牲を最小限にする為には、二ヨーロークの核攻撃もしかたない。」

と言つかもしません。

ついでにイラクに眠るメソポタミアの遺跡にも配慮願います。

60年前、貴国が我が国の京都、奈良に配慮してくださつたよつて。

全世界でどんなに反戦デモが起きよつと、貴国の大統領は考えを改めるつもりは無いように見えます。

一応、貴国は民主主義の国です。大統領の意志を変えられるのは貴国国民しかありません。

最後に、選挙で選ばれた大統領の決断とその結果は、全てその国民が負うのだという事を想起するよつて忠告します。

たとえ、ブッシュ大統領が独裁者フセインだけを標的にしても、ビン＝ラディンは貴国の大統領だけをねらつてはあります。

（佐藤 次郎）

「これは、1冊しかないし、僕が高校に入る前の先輩たちが作つたものだから。」

先輩達の書いている事はもつともだが、みほに見せるわけにはいかない。

「こつちの去年作つたものなら、たくさんあるからいいよ。」

「雅夫君の書いたものもあるの。」

「モチロン。ダカラ、コツチノヲ アゲルカラ、ヨンデミテ。」

みほは04年度の部誌を手にした。

「雅夫君の目の前で読むのはやめておくわ。感想は後でメールする。

」
「
といふことで事無きを得た。

【1年生の時の山の思い出】雅夫の書いた04年度部誌より

1年の夏休みに南アルプスに行つた。

静岡県から入つて、3000m近い山の稜線上を1週間かけて、山

梨県にぬける計画である。

慣れない登山靴で、初日から、かかとにマメができた。

2日目、マメがこすれないようこ、かばいながら歩くが、それでも皮は破れる。

3日目になると、むき出しの肉がこする。

つらいのは朝の2時間。我慢して歩いていると、痛みに慣れ、段々感じなくなる。

5日目の夜、先輩達が次の日の行程を相談していた。2日分の行程を1日で行こうというのである。

ただただ怖かった、この時は。

さて、1年の友達は荷物が神経を圧迫したのか、手が肩から上に上がらなくなっていた。

6日目、2日分の行程なので、暗いうちに出発する。午後、木が全くない所で雷の音を聞くが、無事到着。

（長野の高校生が登山中に落雷に打たれ数人の生徒が亡くなるという事件があった。）

私のかかとのマメは肉が削れて、信じられない事に、クボミができる。

最終日は裸足で歩きたい気分であった。

家に帰つてみると、リンパ腺がはれていた。

新しい皮はなかなかできず、1ヶ月の夏休みの間中、サンダルで過ごした。

今でもそのあとが残っている。

9月の末頃に回復したので、性懲りもなく丹沢にでかける。今度は1人。

（良い子はマネをしてはいけません。）

土曜の午後から出かけたので、泊まる予定の山小屋についた時は暗くなっていた。

ところが、その山小屋は閉まっていた。

土曜なら開いているだろうと、事前の確認を怠つたのだ。

さらに、小屋までは2時間ぐらいで着くからと、水を持つていなかった。

あたりには人は誰もいない。真っ暗な中、とりあえず次の日の昼食を食べてしまつ。

ドラム缶に溜まつてゐる水を飲んで一夜を明かそうかとも思つたが、幸い（とこりか山では常識）懐中電灯は持つていたので次の山小屋まで行くことにする。

ちょっと歩くと、ドサツと前のめりに倒れてしまった。体が冷えて両足が一度につつたのだ。つりやすい体质は体力がついても変わらない。

ここは標高1300mだから、平地より気温が8度ぐらい低い。本来なら、ここで引き返すべきなのだが、1年生の初心者はそんなこと、思いもしなかつた。

次の山小屋も閉まつていたら、どうするつもりだつたのだろうか。この時は1時間ぐらい登つた所の小屋が開いていて事無きを得た。

【みほからのメール】

「雅夫君の書いたもの読んだわ。危ない事はしないでね。」

実は4ヶ月後、雅夫は死と直面する。

みほが先輩の文章を読もうとした時はドキドキした。

明日はマラソン大会とみほの文化祭だ。早く寝よう。ワクワク。ソワソワ。

みほと会つからワクワク。ソワソワ。なのではない。

この時点で雅夫のみほへの思いは「好きか嫌いか」と聞かれれば、もちろん嫌いじゃないから「好きだ。」と答える程度。

あくまで、幼なじみの一人。

ワクワクの原因は雅夫がマラソンが好きだからだ。

1年の春のマラソン100番、秋のマラソン30番、2年の春のマラソン10番。

そして、秋のマクソンなのだ。・・・だから、ソワソワ。

第一部終わり

第一部は【みほの文化祭の日。 11月3日】から、始まります。

愛へ恋へ好きの物語・第一部・初めてのトートまで（前書き）

第一部のあらすじ

大学生の雅夫が書いたさやかさんへのラブレターから、始まる。話は一端、時間をさかのぼり、幼馴染のみほとの出会い。みほの父親の死。雅夫の高校の文化祭。で終わつた。

愛へ恋へ好きの物語・第一部・初めてのスタートまで

【初めてのスタート・・・の前のみほの文化祭の日。11月3日】

秋のマラソンは50kmなので、7時半学校集合で、スタートが8時である。

よつて、朝5時に起きる。外はまだ、暗い。

1年の春のマラソンは10kmで、ほとんど最後尾からのスタートだから、細い道で1000人近い生徒を追い抜くのに手間がかかり、100番だった。

1年の秋は35km地点で足がつり、その後、歩いたり走ったりで30番だった。

2年の春は、3年生にまぎれ込んで先頭からスタートし、10番だった。

今回は一桁が目標である。

去年、山岳部の2年の先輩は完走して10番だったから、完走が必要条件である。

ただ、先輩が言うには完走すれば、十分、10位以内に入れるとは限らないらしい。

山でも、息は苦しくないのに、足がつる事が良くあった。

そういう体質なのかもしれない。つらない事が最低必要である。

という事で、朝はでんぶん質のご飯と、果物を食べた。

果物が「つり対策」に効果があるかどうかは、雅夫の知識では分からなかつたが、なんとなく、そうした。

途中のエネルギー補給と「つり対策」におにぎり2個と、みかん1個を持っていく。

給水所は5km毎にあるが、スペシャルドリンクなどはない。

必要なものは個人が腰に巻き付けて走る。

去年のかかとの傷は完治していたので、バンドエイドは持つていかない。

マメができたら、完走はあきらめるだけだ。

（エイド a.i.d は助けるだから、バンドエイドは傷の治りを助けるバンドという意味かな。）

学校から出発地点までぞろぞろと、20分ぐらい歩く。スタート1分前から、秒読みが始まる。

心臓はドキドキ、アドレナリンの分泌が高まっているのだろうか。20km地点は40番で通過した。

35km地点まで来ると、上位の者でも歩き始める者が、ちらほらでるので、30番に順位が上がった。

去年はこの辺で足がつったが、その兆候はまだ、なかつた。疲れはいるが、みほのことを考えて走っている訳ではなかつた。山の事を考えながら走つた。

【男には、大切な人と大切なものが同時に存在する事がある。普通の女には分からぬ。『私と どどっちが大切なのよ。』とか言う。】

「それは、君の方が大切さ。でも、こっちも大切なんだ。」

なんて、説明ではたいてい納得してくれない。

そんな事が原因で、20年後、雅夫は離婚の危機を迎える。相手はみほとは別人の洋子さん。】

来年の3月には北岳に登るんだ。これぐらい、なんて事はない。冬山では40kg以上の荷物がある。今は空身だ。

利根川の橋にかけての上り坂。ナンダサカ。コンナサカ。

コンチキショウ。コノヤロウ。マツタク、モウ。ブツブツ。アーア。

高橋尚子はエライ。

悪態をついたのが災いして、後7kmという所で、やつぱり、来てしまつた。

また、歩いたり、走つたりで結局24位だった。

ゴールは小学校の体育館で、ほとんどの者が寝つ転がつて休んでい

る。

待機しているだけなのか、校庭には白い救急車が止まっていた。山岳部には寝つ転がって休む習慣は無かつたし、雅夫には、大事な約束があった。

トン汁を食べ終わると、近くの駅へ歩き始める。帰りは電車だ。疲れてはいたが、この時は何ともなかつた。

50kmというと電車で1時間ぐらいかかる。

そのうちに、体が冷えてくる。電車を降りると、たいてい階段がある。

アーツルツル。階段にバナナの皮があつたわけではない。

足をひきづりながら、みほの高校に着いた時は、2時を過ぎていた。

「今、赤いレンガの校門。」

「すぐに行くから、まつててね。」

5分ぐらいして、みほが現れた。

疲れ切つた雅夫にはみほの笑顔はマリア様のようだつた。

「遅かつたから、心配したわ。昨日、救急車の夢を見たの。」

みほの目がうるんだようだつたが、

みほはくるりと振り返り、雅夫を見ずに校舎の方へ歩き出した。

「大変だつたでしょ。50km。」あわてて、雅夫も後を追う。足をひきづらないように努力して。

「いや、そんな事ないよ。走るの好きだし。3月に登る北岳に比べれば。」

雅夫は本当にそう思つていた。しかし、

（天の声）高校生の女の子からすれば、そこまでして来てくれたことに感激していたかもせんね。

雅夫は気づいていなようですが。

（ノ天の声）

「山、気をつけてね。」

「大丈夫だよ。」

「父も、そう言つていたわ。もう、悲しい思いはこりこりだわ。」

(シヨン) 気まずい沈黙の時間が流れた。

(なんとか、この空気を開拓しなくては)

「実行委員長の方はいいのかい。」

「今は何も仕事ないんだけど、3時から、後夜祭があるの。それが

終わるまで、待つてくれる。」

「うん、いいよ。校門の所で待つていてる。」

【文化祭の帰り道】

校内を一緒にまわったが、女の子ばかりだった。

みほの高校は女子校で、校門で一人で待つてるのは恥ずかしかった。

1時間ぐらいして、みほが来た。一人の女性と一緒にだった。

一人は高校生ではないようだった。

「私の幼なじみの雅夫君です。こちらは、同級生の洋子とお姉さん。大学の仏文科の2年生で、いろんな事、教えてもらっているの。」
(こういう時は、最初に、年上の人に向かって紹介するのが礼儀である。)

みほの上品さは雅夫に欠けている点だった。

洋子さんのお姉さんも上品そうで、きれいな人だった。

赤いレンガをバックに、ひまわりの花がプリントされたワンピースがまぶしかった。

みほの高校は駅から遠いのでバスに乗らなくてはいけない。

洋子さんとお姉さんも同じバスに乗った。電車に乗り換えた後は一人だけになつた。

電車は空いていたが、二人で並んで座るのも恥ずかしく、立つていた。

「洋子のお姉さん、きれいでしょう。」

「うん、何といいましょうか、みれちゃいました。」 × × ×

「アノ、みほさんは、アノ、子どもの頃から見てるから。」

「いいのよ、別に。私から見てもきれいだもの。頭もいいし、あこがれちゃう。素敵な女性だわ。」

「本当に素敵な女性つてメッタにいないんだよな。」 ×××

「アノ、いや、そういう事ではなくて。」ウフフ。

「私も素敵な女性になるから、雅夫君も素敵な男性になつてね。マラソン大会、24番で残念だったわね。」

「今度は来年の5月だ。目標はメダル。」

「雅夫君はなんで、山とかマラソンとか好きなの。」

「よく分からんんだけど、マラソンのゴールつて遠いじゃん。山の頂上も遠いんだ。雪山だと3000mの山頂まで3日も4日もかかる。」

雅夫はそこからは見えない山を想像しながら言った。

（山の話になると、みほの事は忘れてしまう。女は私だけを見てと言つ。

その気持ちも分かるけど、男の気持ちも分かつてくれないかなあ。）

「まだ見えない遠い所。だから、無理してでも行きたい。」

「無理は絶対ダメッ。まだ見えない遠い先。私は素敵な女性になつているかしら。」

無理してでも、素敵な女性にならなくつちゃ。あつ、そういう無理はいいのよ。」

前に座つて、一人の会話を聞いていたおばさんが笑つた。

「いいわね。お一人さん。若いつて。」

そう言って、おばさんはヘッドフォンをはずしながら、電車を降りて行つた。

みほは舌を出しながら、言つた。

「ヘッドフォンをしているから、聞こえていないと思つていたのに。降りる駅が同じでなくて良かつた。」

二人は顔を見合させて、笑つた。

そういう上品でない仕草もみほがすると、かわいかつた。

そんなことがあって、秋は深まり、一人の関係も徐々に深まつてい

くのでした。

【恋のキューピッド】

翌日は一人とも代休で休み。二人は何をしていたのでしょうか。そして一日おいた、翌々日の学校からの帰り、雅夫が電車を降りると、

偶然にもみほがいた。

同じ電車だったのだ。

「おどといは恥ずかしかつたな。」

「そうね、びっくりしたわ。」

（天の声）

さて、ここで「恥ずかしかつた」と「びっくりした」という言葉は、全然意味が違うという事にお気づきであるうか。

実は（realily, in fact）

『いいわね。お一人さん。若いつて。』と指摘された時、みほは、これまで自覚していなかつた自分の気持ちに気がついてしまって、
びっくりしていたのである。

舌を出したのは、その照れ隠しだつたのかもしれない。

（天の声）

二人は以前のように遊歩道を家へと歩き始めた。

実際にものさしで測れば、二人の物理的な距離は近くなつてはいなかつたが、

精神的距離は近づいたようだつた。

「あのおばさん、ヘッドフォンしてたでしょ。何聞いてたか聞こえ
た？」

「疲れると聴力が落ちるからね。気がつかなかつた。」

「ビージーズよ。」

「ふーん。ぼくもビージーズの曲は聴くよ。」

「えつ。私、ビージーズ大好きなの。」

なんでだか、聞いていると、とつても落ちつくる。
小さな恋のメロディって映画、知ってる？

音楽はほとんどビージーズが作っているのよ。
もうすぐ終わっちゃうけど。」

と、みほは劇のセリフのように言った。

「FIRST OF MAYは知っている。映画の内容は知らないけど。」

「今度の日曜日どうかしら。小さな恋のメロディ。」

…という事で、おばさんはキューピットになってしましました。
なんだか、話ができますが、これはファイクションで
すから。

（天の声）同じ電車だつたのは偶然かどうか、怪しいですよ。
ヘッドフォンからビージーズの曲が聞こえてたのも。

雅夫が「ビートルズじゃないの。」と答えると

「ビージーズもよ。」と答えればすむし、

たとえ、雅夫がビージーズを知らないても、
映画を見に行くという結末にたどり着くストーリーを作るのは簡単
だ。

頭の良い女の子が、1日、考えておけば。単なる推測に過ぎません
がね。

（／天の声）

Leaves have not fallen . An
d they have not fallen in
love , yet .

11月初めの遊歩道にはまだ、落ち葉は早く、
二人が恋におちいるにも、もう少し時間が必要だった。
ただ、みほはその予兆を感じているようだった。

「じゃあ。今度の日曜日。」

以前のよう、自然に、一人は別れていった。

たぶん、この段階では「好き」が最もあてはまる。

2週間後には「恋」かもしれない。

そして、2年後には「好き」でもない。

「恋」でもない。

「愛」のようなものに変わるのである。

(5月にメダルをとった。しかし、その時、みほはそばにいない)

【2005年の初めてのトークの前々日。11月8日】

朝。雅夫は駅に向かつて歩いていた。

歩くというより、早足に近い。しかも、息を止めて早足で行く。

(あと、少し、あの電柱まで。)

息を大きく吸い込むと、また、息を止めて歩く。

(次はどこを目標にしようか。)

冬が近づくと、このトレーニングを始めるのであるが、

今年はその開始時期が去年より早い。みほが原因だろうか。

しかし、まだ、雅夫にそういう自覚はなかった。

駅の改札口の手前30mぐらいの所で、雅夫は前を歩くみほを見つけた。

朝の駅で、みほと会うのは初めてだった。

みほは、駅員に向かつて何かをしゃべり、頭を下げた。

雅夫は走つて、みほに追いついた。

「はあはあはあ。今、何を話していたんだい。」

「あら、雅夫くん。ただ、お早うござりますって言つただけよ。」

「知り合いなのかい。」

「名前も知らないわ。」

でも、私がお早うござりますって言えば、あの駅員さんも気分がい

いでしょ。

それで、あの駅員さんが一人の人に親切にすれば、
その一人の人は気分が良くなるでしょ。

そして、その一人の人が、4人の人に親切にするでしょ。
「分かつた。それが10回繰り返されると、2の10乗だから、1
024人だな。」

「そんな単純な計算にはならないと思うけど、

女子高生のかわいい笑顔は相当な力を秘めていると思うわ。」

「日本には女子高生は100万人はいるから、 1024×100 万
で10億人だ。」

これは、日本だけでなく世界を変える力になるかも知れない。
「だから、それは単純すぎる計算だけど、そうなつてくれると、う
れしいわ。」

それが、みほができる平和への小さな願いなのかもしれない。

「雅夫くんこそ、真っ赤な顔をして、どうしたの。」

「毎日、駅まで、息を止めながら歩いてるんだ。」

「それ、山のため。」

「うん。12月中はコートもセーターも着ないし。」

「それも山のため。」みほがムツとした表情で言った。

そんな、みほの表情は初めて見たので、雅夫はビックリした。

「いけないかなあ。」

「いけなくはないけど。もういいわ。そんな事。電車が来たわ。」

そこで、この会話は途切れてしまつたが、雅夫の頭には何か奇妙な
感じが残つた。

電車は高架になつてるので、遠くに秩父の山々が見えた。

「雅夫くんが行こうとしているのは、あそこに見える山？」

「いや、もつと遠くの、もつと高い山。今頃は雪が積もつてゐるか
もしれない。」

そう言って、雅夫は何か後ろめたさを感じた。

何年後かにはヒマラヤの山にも行つてみたいと、思つていたが、

それは言つてはいけない事のようと思えた。

【『小さな恋のメロディ』といつ映画について】

朝のＳＨＲが始まつても、さつきの奇妙な感じは残つていた。
みほと見ることになつていて、『小さな恋のメロディ』を昼休みにインターネットで調べて見た。

公式サイトも個人的なサイトもたくさんあつた。

（天の声）みなさんも、調べてみてください。（／天の声）
個人的なサイトの半分くらいは、35年前に初めて公開された時に
見た人のものであつた。

ＴＶでも、放映されたり、ＤＶＤでも発売されていて、それを見た
人のもあつた。

これは伝説的な作品らしい。当時のティーンに絶大な支持を得たみ
たいだ。

内村光良が、笑う犬の生活の中で、「この映画は14歳までに見な
さい」と言つていたらしい。

この映画は純粋な恋のメルヘン。

子供達の立場で描かれ、大人達をこけにしている。

（天の声）

『大人は、子供の頃の事を、時々思い出すこと。』

（／天の声）

多くの大人は忘れてしまつていて、
汚れた大人の心を浄化させてくれる。

（天の声）後々の雅夫とみほの現実世界に関わる映画の重要な場面。
ダニエルとメロディーは学校を出て、墓地に行きます。ＢＧＭは「
若葉の頃」。

二人は墓地に座り、『リンク』をかじります。メロディーが二つの墓石
の言葉を読みます。

奥さんの墓石に書かれている言葉。

『ここに最愛の、美しきエラ・ジョーン眠る。妻であり生涯の友でありしもの。』

50年にわたる幸福に感謝をささげる。 1893年7月7日永眠。』
『那さんの墓石に書かれている言葉。

『ヘンリー・ジョーン。妻エラ・ジョーンのもとに逝く。 1893

年9月11日。』

M「奥さんが死んでから2か月しか生きていなかつたのね。」

D「死ぬほど愛していたんだよ。」

M「本当に愛し合っていたのね。ねえ50年も愛せる?」

D「大丈夫、もう1週間も愛しているもの。」

(／天の声)

第一部終わり

第三部は【始めてのデート】から、始まります。

初めてのデートの終わりまで

愛>恋>好きの物語 - 第二部 - 初めてのデートの終わりまで

【初めてのデート。11月10日。映画館まで】

前日のメール。

「ちょっと、寄る所があるので、待ち合せは有楽町の数寄屋橋で、3時によろ。

雅夫」

2時、雅夫は銀座6丁目にいた。洋書の専門店イエナにいくためである。

英語の先生が「楽しく英語を勉強するには英語で書かれた小説を読むのが良い。

それも、日本語で一度読んだものが良い。

銀座にイエナという洋書の専門店がある。何万冊もの英語の本があるぞ。」

と、おっしゃっていたのを思い出したからである。

雅夫はみほとは違つて純文学には興味はなかつたが、SF小説は大好きだつた。

『The ape of planet猿の惑星』がいいかな。
ape=しつぽのない猿（ゴリラ、チンパンジー）。

高校2年生も半分が過ぎ、受験勉強をしなくてはいけない。公認会計士になるのが雅夫の夢だつた。

会計士のテレビドラマ見たのがキッカケだつた。（単純）また、会計士というのは高収入を得られるというのも魅力的であつた。（不純）

それで、調べてみると、会計士になるには商学部がいいらしい。ということと、3年は文系のクラスを希望していた。

さて、英語の先生に書いてもらつた地図を手に持つてゐるのだが、

見つからない。

50m先のマツキヨに入つて、聞いてみると。

「イエナは1年ぐらい前に閉店になりましたよ。」と、教えてくれた。

しじうがないので、ソービルで時間をつぶす。

2時55分。数寄屋橋までは100mだ。人混みの中にみほがいた。

「みほさん。」雅夫は手を振りながら、みほのところへ走った。

「まつた？」

「今、来たところよ。雅夫君つて、まわりを気にしないのね。」

「えつ。何が？」

「手を振つて名前を呼んだことよ。でも、恥ずかしさより、うれしさの方が勝つてゐるわ。

探していた本は見つかった？」

「イエナの店じたちは閉鎖されていた。インターネット販売に移行するんだって。」

「そうね。洋書なんて、在庫をたくさん用意しておいても、なかなか売れないものね。」

「インターネットで思い出した。この映画、インターネットで調べてみたんだ。

そしたら、たくさんのサイトがあつた。

たいていは、33年前に初めて上映された時に見た人の感想だつた。

「最近、リバイバルが流行つてゐるわね。」

「実は、この数寄屋橋は50年前の『君の名は』という「リジオドラマで有名になつたんだ。

それが最近、NHKでリメイクされた。」

と言つてしまつて、まずかつたかなと思い、

「話しさは変わるけど、この前、映画化されたタツチも、

少年サンデーに連載されたのは24年前だ。

だから、25才以上で『みなみ』という名前の女性はいないんだ。」

「詳しいのね。」

「全部、インターネットで得た知識さ。」

「へえー。あら、もう時間よ。」

(天の声)

『君の名は』といつドラマは昭和20年の東京大空襲の夜、偶然、数寄屋橋で出会った男女が、半年後に再会を約束する。しかし、一人は運命に翻弄される。すれ違ひの悲恋の物語である。そこまで。雅夫は知っていたが、

『戦争』という言葉は、みほの前では禁句だったから、タッチの話しにすり替えたのである。

(天の声)

【初めてのデート。11月10日。映画館の中】

映画館の中はそんなに混んでいなかつた。

ロンドンの小学校。ガキ大将のオーンショーと気の優しいダニエル君がいた。

二人は大の仲良し。

そんなある日、二人は体育館で女の子たちがバレーの練習をしているのをのぞき見する。

ダニエル君はその中の女の子、メロディちゃんに一目惚れ。

彼女のことを思い浮かべて走つたら、運動会で1位になつた。

それを知った親友のオーンショー、友情を發揮するのはこの時とばかり、キューピットの役をかつてでる。

しかし哀しいかな、メロディちゃんは反応なし。

でも、本当はメロディちゃんもダニエル君が好きだったんだ。

それが女心というものか。

そんなこんなで、ダニエル君とメロディちゃんは墓地でデート。

二人で手をつないで歩いている。そこにタ立が。

ダニエル君とメロディちゃんは翌日、学校を休んで海岸に遊びに行く。

（良い子はまねをしてはいけません）

砂浜でトンネルを掘つたり、二人でアイスクリームを食べたり（小学生だからね）

それはそれは素晴らしい一日でした。

でも、翌朝ふたりは校長に呼び出され、説教をされる。

そこで、ダニエル君は宣言する。「僕たち結婚します」メロディちゃんもうなづく。

さあ、大変。大人達は大混乱。

「なぜなんだ。一緒にいたいから結婚したいだけなのに。」

教室に戻つたダニエルを、オーンショーを筆頭にみんながからかった。

（良い子は恋をからかいの対象にしてはダメ。本人は真剣なのです。）

それで、気の優しいダニエルも、ガキ大将のオーンショーにとつくみあいのけんかを挑んだ。

その後、オーンショーはダニエルに謝る。

そして、「二人を結婚させてやるんだ。」と心の中で誓い、結婚式の準備を始める。

昼休みが終わつても、生徒達は教室に戻らない。

先生たちが騒ぎ出す。頭の固い先生たちは二人の結婚式を許す訳がない。

二人は結婚できるのか。たわいのない話だが。

みほ「心臓がドキドキしてきたわ。」雅夫は無言。

ガード下の空き屋で子供達だけの結婚式が開かれていた。

オーンショーが牧師。そこへ先生達が侵入してきて大騒ぎ。

オーンショーは花嫁と花婿をトロッコに乗せる。

ダニエルとメロディの二人は花咲く野原をまっすぐに、どこまでも

。END。

【吊り橋効果】

（天の声）好きな人といふと、ドキドキする事がある。

また、映画やサッカーの試合を見ている時にドキドキする事がある。この一つのドキドキの原因は全く別のものだが、人間の脳はそれを混同してしまつ事がよくある。

これを心理学用語で『吊り橋効果』といふ。

『吊り橋効果』といふのは、次のような実験からきています。

200人の男性を二つのグループに分け、

一つは高さ50mの揺れる吊り橋を、もう一つは、高さ1mの頑丈な橋を渡らせます。

どちらのグループも、橋のまん中で一人の女性に幾つかの質問を受けます。

渡り終わった後で、女性に對しての印象を聞くと、

吊り橋を渡つたグループの男性は女性に好意を持つた人が多かつたという結果が出ました。

ということで、二人でジョットロースターに乗るのは、ある意味、理にかなつた行為なのです。

また、一人で美しい景色を見るのも良いでしょ。景色の美しさと相手の美しさと誤解してしまつのです。

恋は誤解から始まる。だつて、そうでしょ。

雅夫がみほに恋をして、太郎が花子に恋をする。

太郎はみほに恋をしていない。

この時、「みほが世界で最高の女性だ。」と、思つてゐるのは雅夫だけです。

つまり、それは絶対の真理ではなく、誤解です。

さらに言えば、その誤解をといて、

「みほが世界でただ一人の女性である。」

という事を絶対の真理にする長い道のりが、愛なのかなと思います。親子の愛はかなり最初から真実ですが、他人への愛は真実にしています。

（天の声）

【映画館の外へ。日比谷公園】

さて、映画は終わった。時刻は夕方。映画館の外へ出ると雨。というより、30分後にはやんていだから夕立。しかし、11月に夕立は変だ。

とにかく、一人ともカサは持つてきていない。

（映画のストーリー。ダニエル君とメロディちゃんは夕立の中を手をつないで歩く）

この時、映画のストーリーをはつきり意識していたかどうかはわからない。

が、気がつくと一人は手をつないで雨の中を小走りに日比谷公園の方に向かっていた。

それは全くの自然の状態だった。

日比谷公園につくと、雨はやみ、夕焼けの中に、うっすらと虹がかかつっていた。

とても美しい景色だった。一人は無言でそれを見つめていた。

（天の声）

ここで視点を一人の後に移して見ましょう。

夕焼けは真っ赤ではなく、オレンジ色です。

そのオレンジ色をバックに手をつないだ一人のシルエットが黒く浮かびます。

夕立後の風は大気をふるわせ、かざるうのようにそのシルエットがゆれます。

そのふるえは、何か、二人の運命のはかなさを感じさせます。うつすらとした虹の色が、いくらか濃く、あざやかになります。

それは、二人の明るい未来を示しているのでしょうか。

映画ならここで、I kissed your cheekなのかもしれないが。

（天の声）

公園の入り口の看板が一人を現実世界に引き戻した。

『思い出ベンチ事業』

雅夫が読んだ。

『IJの公園のベンチは一般の方々の寄付によって設置されており、寄贈された方のメッセージがベンチのプレートに記されています。』

「何が書いてあるのかしら。」

二人はベンチを探した。

『私たちはこの公園で出会い、結婚しました。はるき まちI』

「この方達、おいくつぐらいかしら。」

「ベンチ一基25万円って書いてあつたから、20代ではないだろうね。」

「もつと、口マンチックな話できないの。」みほが笑顔で怒った。

「じゃ、精一杯の努力をして。」

雅夫はつないでいた手をはなし、ハンカチでベンチのしづくを拭き始めた。

「すわるつか。」

「ありがとう。」

「映画の墓地の場面を思い出しているんだ。」

「私もよ。」

「あの墓地の夫婦は70歳ぐらいで、ほとんど同時になくなつただろ。」

このベンチの夫婦もああなるんだろうか。」

「そして、私たち二人は…?。でしょ。」

「あはは、同じ事を考えていたか。」

「実はね。『君の名は』の二人は、戦争で離ればなれになつちゃううんだ。」

「知っていたわ。リメイクされたドラマ見たから。」

それに触れようとしなかつた雅夫君の気持ちも分かつていてわ。でも、良かつたのよ。ちゃんと黙ってくれて。私たちは逆のケースよ。

父の死は日本のためになつたの?それが分かるのは、きっと何十年

後ね。

でも、日本のためになつたと、今、言つて欲しいの。」

雅夫とみほの間に刺さつたトゲは抜けたかのようと思われたが。

「戦争があつた事を忘れてはいけないし、

平和のように見えても戦争があるという事を知らなくてはいけない。

でも、戦争のない世界なんて、来るんだろうか。」

「そこで、あきらめたら、ダメッ。」

みほが、2日前とおなじように、ムツとした表情になつた。

「ごめんなさいね。みんな、そう言つわ。でも、それじゃだめなの。

」

みほのほほをひとしづくの涙が流れた。雅夫は何も言わずに、みほの手を握つた。

「雅夫君が悪いんじやないの。

でも、この気持ちが消えるには、きっと何十年もかかるんだわ。」

雅夫は何も言えなかつた。

2日前の奇妙な感じが分かつてきた。

二人の間には、なかなか越えられない壁がある。

二人は当事者とその幼なじみという関係だつた。

みほの父親と直接会つたことはなかつた。

雅夫は大きな壁をはつきり意識したのだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5342a/>

愛 > 恋 > 好きの物語

2010年10月28日07時40分発行